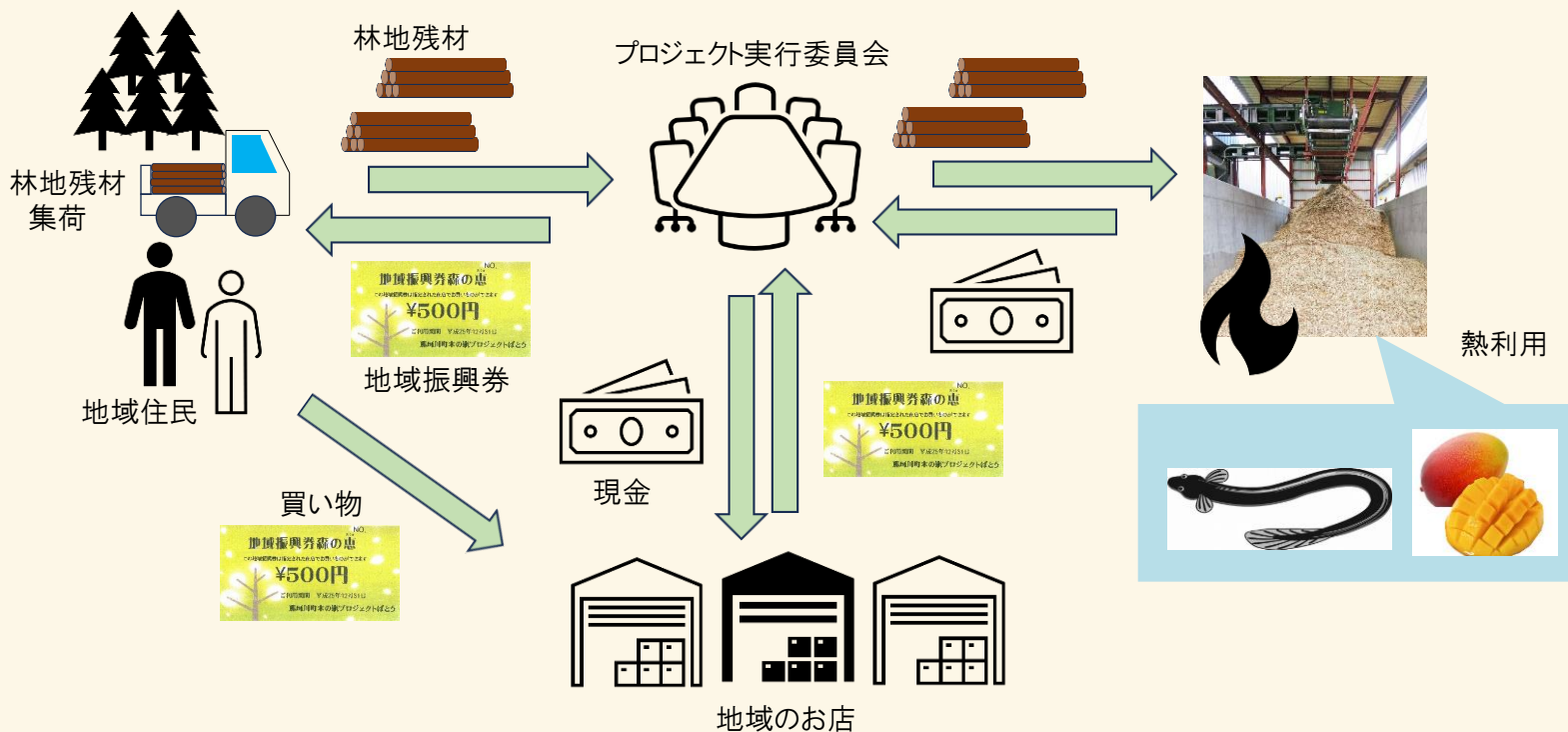


エネルギーフォーレ50 ～木の駅プロジェクト～



木の駅プロジェクトとは、岐阜県で始まり全国に広がっている取り組みで、地域の森林に残る林地残材（低質材）を、地域住民参加型で集荷するというものです。

地域住民が集荷した材を、プロジェクト実行委員会が地域のお店だけで使える「地域振興券」と引き換えます。参加した住民は地域振興券を使って買い物し、地域を活性化させる取組です。集まった林地残材は、熱利用設備の木質バイオマス燃料として活用されるなど、地域の実情・特性に応じて活用されます。



地域が自立した循環型社会を構築することを目指したエネルギー50により作られた「那珂川モデル」の施設は、まさに木の駅プロジェクトにぴったりの施設と言えます。

全国に普及した木の駅プロジェクトの中には、集まった林地残材の安定的な利用先がない、などの課題も発生するそうですが、那珂川モデルでは安定的な利用が出来る施設が揃っており、全国有数の出荷量を誇る木の駅プロジェクトとなるそうです（※）。

※R4農村計画学会論文集 Vo.2 No.1 木の駅プロジェクトにおける出荷主体の行動に関する分析

町の商店街からは「木の駅プロジェクトのおかげで10何年振りにテレビが売れた！」という喜びの声があがったとのこと。



写真のように、多くの参加者により取り組まれている那珂川モデルの木の駅プロジェクト。地域住民参加型の取組として、また、地域活性化の取組として、「脱炭素+地方創生」を目指すトーセンが出したひとつの答えと言えるかもしれません。

